

## P2-047

## 自閉スペクトラム症児の睡眠に関する研究動向

池内 由子、武井 祐子、岡野 維新、水子 学

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

## 【目的】

DSM-5で自閉スペクトラム症（以下ASD）の診断基準に感覚過敏が下位項目として新たに加わり、これまで診断基準の中に入っていなかった特徴が重要視されるようになっていく。DSM-5の診断基準には入っていないが、国内外の多くの文献でASD児には睡眠問題がみられるという指摘がある。ASD児の睡眠問題は、本人の睡眠覚醒リズムの問題や養育者への負担、また日中の問題行動との関連など様々な観点から報告されている。本研究ではASD児の睡眠の問題に関してこれまでの研究動向について整理し、今後の課題について検討する。

## 【方法】

ASD児の睡眠問題の研究の動向を検討するために、データベースにより文献を検索した。国内文献はCiNiiと医学中央雑誌Webにより、「自閉症」「自閉スペクトラム症」「自閉症スペクトラム障害」「睡眠」「睡眠覚醒リズム」をキーワードとして検索をおこなった。また、国外文献はPsycINFOにより、「Autism Spectrum Disorders」「SLEEP」「SLEEP WAKE CYCLE」をキーワードとして対象を12歳までに限定して検索をおこなった。その結果184件が該当した。重複する文献13件を除外し、171件の文献の中から会議録と抄録25件を除外した。抽出した146件の中から、要約の精査によりASD児の睡眠を扱っているもの108件に限定した。

## 【結果と考察】

対象文献を検討した結果、ASD児には睡眠の問題が合併しているという報告あるいはそのことに言及した文献は108件中93件であった。その中でASD児における睡眠問題は、本人の睡眠覚醒リズムの問題、日中の問題行動やASDの特徴との関連、養育者の負担に関する問題に分類することができた。これらのことからASD児には睡眠問題が合併しているという報告が多く、ASD児の睡眠問題は生物学的側面と心理社会的側面が相互に影響しあっており、本人にとっても家族にとっても日常生活と密接に関連している問題であると考えられる。一方、対象者を特定した具体的なデータに基づく研究は、国外の63件に対して国内では16件と少なかった。ASD児の睡眠問題については未だ不明な点が多く、今後の課題として、客観的および主観的な睡眠状態の特徴、本人やその家族の睡眠問題に関する困難や認識の様相を明らかにすることが望まれる。さらに、睡眠問題の規定因を分析することで、睡眠の質および生活の質の向上を図る手立てを検討することが求められる。

## P2-048

## 感覚過敏のある‘気になる幼児’への保育に関する調査研究

町田 唯香<sup>1</sup>、橋本 創一<sup>2</sup>、淵上 真裕美<sup>1</sup>、柘 千晶<sup>3</sup>、秋山 千枝子<sup>4</sup><sup>1</sup>東京学芸大学 教育学研究科<sup>2</sup>東京学芸大学 教育実践研究支援センター<sup>3</sup>信州大学 教職支援センター<sup>4</sup>あきやま子どもクリニック

## 【目的】

保育の現場で支援が必要な発達障害などを含む‘気になる幼児’において、感覚過敏のある子どもに焦点をあて、その現状を把握すると共に、保育の実際と保育者のストレスを明らかにする。特に触覚過敏を中心とする検討を行う。

## 【対象/方法】

1都5県の公立保育園400園を対象に質問紙調査を行った。返送があった186園(回収率47%)の5歳児クラス担当保育者186名(平均経験年数16.9年,SD:9.1)を分析対象とした。研究協力者には研究主旨の説明と了解を得た上でデータを匿名化し個人情報に配慮した(東京学芸大学研究倫理委員会承認[152])。

## 【結果/考察】

回答者担当クラスの平均人数は20.9名(SD:6.3)であった。その中で障害児(診断のある幼児)は平均0.9名(SD:1.1)、気になる幼児(特別な支援や個別に対応が必要な幼児)は平均3.1名(SD:2.5)という結果であった。また、得られた186園の回答のうち触覚過敏・視覚過敏・聴覚過敏の内いずれかの感覚過敏がある幼児がいるという回答は163園(87%)であった。触覚過敏のある幼児に過敏さが現れた時にとる行動は「その場から離れる」「落ち着きがなくなる」「泣く」「固まる」の順で多く、視覚・聴覚過敏の場合は「落ち着きがなくなる」「その場から離れる」「叫ぶ」「他の子に手を出す」の順であった。感覚過敏のある幼児への保育では、「活動の始まり(前)に説明をして安心させる」「落ち着ける場所を作る」といった予防的対処、「落ち着くまで待つ」「説明をして安心させる」といった事後の対処がなされていた。感覚過敏により幼児が起こす行動や保育者が行う予防的・事後の対処には感覚過敏の種類による違いはみられなかった。次に感覚過敏について、触覚過敏を中心に4つの群(触覚のみ/触覚+視覚or聴覚/視覚or聴覚/触覚+視覚+聴覚の全部)に分けた。そのうち触覚過敏を含む3群の触覚過敏の頻度と保育者のストレス度の相関分析をおこなった結果、いずれの群でも「そばに人が近づくと逃げる」という特徴の頻度とストレス度の相関(例えば触覚+視覚or聴覚過敏群; $r=.746, n=33, 1\%$ 有意)が最も高い結果がみられた。触覚過敏の頻度と保育者のストレス度の関連性(相関)の結果から、対象幼児と保育者のコミュニケーションに及ぼす影響が高いことが明らかになった。こうした現況において、感覚過敏のある‘気になる幼児’へのより一層の保育の工夫や保育者のストレス軽減に向けた方策が早急に必要であるものと考えられる。